

Title	『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書における非古典仮名遣い表記について：定家仮名遣い系統の仮名遣書と比較して
Author(s)	姜, 盛文
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2020, 54, p. 41-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91378
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『古言梯』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書に おける非古典仮名遣い表記について

—定家仮名遣い系統の仮名遣書と比較して—

姜 盛 文

キーワード：仮名遣書／古典仮名遣い／歴史的仮名遣い／非古典仮名遣い

1. はじめに

仮名遣いの根拠を古事記・日本書紀・万葉集といった、平安時代初期までの資料に求める古典仮名遣い（いわゆる歴史的仮名遣い）は契沖の『和字正濫鈔』によって成立した。『和字正濫鈔』で契沖は当時古典を研究したり和歌を詠んだりする際に一般に用いられた定家仮名遣いの不備を指摘し、仮名遣いが乱れる前の資料の表記に従うべきであると主張した。たとえば、「後（おくる）」の項では「万葉。をの字用こと誤なり」と、オクルの仮名遣いは「おくる」が正しく、「をくる」は間違いであると指摘している。

以後、古典仮名遣いは定家仮名遣いの対抗者として勢力を増し、国学者の間で広く使用されるようになった。定家仮名遣いで書かれたあらゆる資料が古典仮名遣いに改訂される事例からその流れが窺い知れる。たとえば、賀茂真淵は漢詩人の竜公美（龍草廬）の和歌を添削する際に定家仮名遣いを古典仮名遣いに直しており、¹⁾ 賀茂季鷹は家蔵している蔵書の本文を定家仮名遣いから古典仮名遣いに校正した。²⁾ また、若い頃に定家仮名遣いを使用した本居宣長が古典仮名遣いを唱えるようになったこともよく知られている。この他、源氏物語の用語をまとめた『源語梯』は『源語詰』の本文を古典仮名遣いに直し、内容を増補したものであることが康（2016）によって明らか

になっている。

一方、『和字正濫鈔』以降の古典仮名遣い系統の仮名遣書（以下、古典系仮名遣書）には著者の仮名遣い観に基づき、ある言葉の表記について正誤判断したり、古典仮名遣いではない仮名遣いの例、いわば非古典仮名遣いの例を出したりすることがしばしば見られる。仮名遣書というものは著者が正しいと判断する仮名遣いを示すことを目的とした資料であるため、比較例を出すことは本文構成の工夫としてあり得る。

ただ、一部の資料では非古典仮名遣いの例として定家仮名遣いで書かれた言葉を合わせて示すことを明示しておきながら、定家仮名遣い系統の仮名遣書（以下、定家系仮名遣書）で確認できないものが載っていることが見られる。もちろん資料を製作するにあたって必ずしも他の仮名遣書のみ参考にする必要はない。ただし、このように定家仮名遣いの例として示されているが、定家系仮名遣書の収録語と仮名遣いが一致しない場合などは、その出処を確かめる必要があると思われる。

そこで本稿では『古言梯』以降の古典系仮名遣書に見られる非古典仮名遣い表記について考察する。範囲を『古言梯』以降の古典系仮名遣書に絞ったのは、『和字正濫鈔』と『古言梯』の間に刊行された古典系仮名遣書がほとんどないためである。³⁾ 古典系仮名遣書は『古言梯』が刊行されてから活発に作成されるようになった。

また、もともと非古典仮名遣いというものは定家仮名遣いを含めて古典仮名遣いではない表記を指すため、非古典仮名遣いについて考察するには古典仮名遣いを基にしていない資料と比較しなければならない。古典仮名遣いで書かれていない資料は多数あるが、本稿では定家系仮名遣書を用いる。これは、定家仮名遣いは仮名遣書などの資料で比較的確認が用意であるが、そうでないものは出典が必ずしも明らかではなく、調査がむずかしいためである。

本稿の構成は次のとおりである。2節で先行研究を概観し、3節で各資料において定家仮名遣いで書かれた言葉を調査する。4節では3節の調査結果をもとに定家系仮名遣書の収録語と比較する。最後に本文をまとめる。

2. 先行研究

仮名遣書は著者が正しいと判断する仮名遣いを提示する資料であるため、著者の認識と異なる仮名遣いを合わせて提示することも可能である。一つの仮名遣書に複数の仮名遣いを提示することには単純に異なる仮名遣いを提示して比較する目的もあれば、著者にとって間違っただけの仮名遣いを示してそう書かないように注意させる目的もあるだろう。

異なる仮名遣いを提示するというと、定家仮名遣いと古典仮名遣いの関係がまず思い浮かぶが、定家系仮名遣書の間でも間違っただけの仮名遣いを指摘する記述が見られる。たとえば、元禄4(1691)年刊の『初心仮名遣』は序文に「上に書処は自他共に日比誤来れる書ざまなり。其中に記は其正儀也。其下に記は其正字をあらはす也」(句読点は稿者による。以下同様)とあるように、著者が思う間違っただけの仮名遣いと正しい仮名遣いを共に示している。また、『初心仮名遣』の著者が思う正しい仮名遣いは、序文の「引用ゆる所二人丸秘抄の仮名遣于世定家仮名遣といふあり。これを初めとして先達の古書によりてまじへ集めて記す者なり」という記述から、『仮名文字遣』に見られる定家仮名遣いを基本にしていることが明らかである。

しかし、久保田(2014・2016)によれば『初心仮名遣』は『仮名文字遣』の内容をそのまま踏襲していない。また、氏は本書が正しいと示した言葉の中には『仮名文字遣』を含む他の定家系仮名遣書の収録語と表記が異なるものがあると指摘している。たとえば、慶長版本『仮名文字遣』に「あおな(蔓・菁蕪)」という語があるが、『初心仮名遣』では「あをな」を正しいものとしている。本書が『仮名文字遣』を批判的に受容していることは、本文の前に「同抄(稿者注:『二人丸秘抄』、すなわち『仮名文字遣』)誤之分」という項目があることでわかる。⁴⁾

一方、古典仮名遣いはそもそも定家仮名遣いの誤りや不備を指摘することから成り立った表記であるため、古典系仮名遣書には定家仮名遣いの例がし

ばしば見られる。『和字正濫鈔』は巻一の冒頭で行阿の『仮名文字遣』に問題があることを次のように述べている。

世に行阿といふ人の仮名文字遣づかひといふ物ありて、(中略)加之、行阿思案するに、権者の製作として、真名の極草の字を、伊呂波しづめに縮なして、文字の数のすくなきに、いるひ、をお、えゑへ、同読の有にて知りぬ。(中略)更に又ほ、わは、むうふの字等を、あたらしくしるしそへ畢。(中略)然るに混乱猶おほきは、親行も世俗流布の仮名にまかせられける歟。又行阿の添られたる中にあやまり出来たる歟。又行阿の勘そへられたる、ほわは等にも、混乱あり。無用の事もなきにあらず。(『契沖全集』第十卷 pp.112-113)

また、本文では言葉によって「～と書くへからす」などの注で非古典仮名遣いの例が挙げられている。本書が古典仮名遣いを最初に提唱したため、本文の見出し語はすべて古典仮名遣いに立脚して定家仮名遣いと表記が相違していると考えがちであるが、高瀬(1997)は必ずしもそうでないことを明らかにしている。氏は少数ながら見出し語に『仮名文字遣』と一致するものが見られ、それらの多くは上代文献から確認できないものであると述べている。また、「とをる(通)」「にい(新)」といった定家系仮名遣書に見られない表記⁵⁾が掲げられていることも指摘している。このような表記は近世初期版本⁶⁾や定家系以外の仮名遣書⁷⁾に見られる。氏は契沖が近世初期版本に見える仮名遣いを含めた、定家仮名遣いを基にしている当時通用の仮名遣いをも視野に入れていたと結論づけている。

仮名遣書の流れを概観した今野(2016)も古典系仮名遣書に掲げられている定家仮名遣いの言葉について述べている。『掌中仮字便覧』の項で氏は本書で示されている定家仮名遣いの言葉と慶長版本『仮名文字遣』の収録語を比較し、お互いに一致しないものがあることを指摘している。天保6(1835)年刊の『掌中仮字便覧』は凡例に「又定云々と記したるは定家かな也」と、

一部の収録語に定家仮名遣いの例を添えていることを明示している。たとえば、「うひ（初）」の項目の下に「定 うゐ」と書いて定家仮名遣いではウイという語を「うゐ」と書くことを表している。

しかし、「つかひ（使）」の場合、『掌中仮字便覧』では定家仮名遣いの例として「つかい」が挙げられているが、慶長版本『仮名文字遣』では「つかひ」のみ立項されている。ただし、「『仮字便覧』（稿者注：『掌中仮字便覧』）」が具体的な『仮名文字遣』テキストを座右に置いて編まれたとは限らないのであって、こうした対照は必ずしも有効ではない可能性もある。」(p.267)と述べているように、本書が定家仮名遣いの言葉を示したとしても『仮名文字遣』のみ参照したと限らないことを注意しなければならない。

高瀬（1997）と今野（2016）は古典系仮名遣書における定家仮名遣いの言葉について調査したが、両研究とも一つの資料におけることがらしか述べていない。また、今野氏は『掌中仮字便覧』と慶長版本『仮名文字遣』を比較して、『仮名文字遣』に見られないものが『掌中仮字便覧』に「定家かな」として載せられることを指摘することにとどまっている。そこで本稿では資料の範囲を拡張して『古言梯』以降の古典系仮名遣書を対象とする。調査結果を概観した後、定家系仮名遣書と比較して、資料に収録されている非古典仮名遣い表記について考察する。

3. 非古典仮名遣い表記が掲げられている古典系仮名遣書

3.1. 調査資料

今回調査した資料は以下の16資料である。

【表1】今回調査した『古言梯』以降の古典系仮名遣書

資料名	著者	成立・刊行	資料名	著者	成立・刊行
和字便覧	渾沌斎松月	安永5 (1776)刊	かなつかひ早引	川北友成	文化11 (1814)序
正誤仮名遣	賀茂季鷹	天明8 (1788)刊	今古仮字遣	高井八穂	文化15 (1818)刊

資料名	著者	成立・刊行	資料名	著者	成立・刊行
増補袖珍 かなつかひ	雲錦亭	文化1 (1804)刊	尚古仮字用格	山本明清	文政6 (1823)刊
狂歌かなつかひ	菅原長根	文化1 (1804)刊	文章仮字用格	大蔵永常	天保1 (1830)刊
雅言仮字格	市岡猛彦	文化4 (1807)刊	掌中仮字便覧	大野広城	天保6 (1835)刊
改正増補 和字便覧	藤原昌敷	文化8 (1811)刊	増補正誤仮名遣	鶴峯戊申	弘化4 (1847)序
古今仮字つかひ	橋本稲彦	文化10 (1813)刊	増補古言梯標註	山田常典	弘化4 (1847)刊
雅言仮字格拾遺	市岡猛彦	文化11 (1814)刊	山路のたづき	佐久間果園	嘉永3 (1850)跋

このうち『和字便覧』『正誤仮名遣』『増補袖珍かなつかひ』『改正増補和字便覧』『古今仮字つかひ』『古今仮字遣』『掌中仮字便覧』の7種の資料に非古典仮名遣いの言葉が示されていることが確認された。また、『増補袖珍かなつかひ』『狂歌かなつかひ』『古今かなつかひ』『古今仮字遣』『尚古仮字用格』『掌中仮字便覧』の6種の資料に非古典仮名遣いに関する記述があった(下線は稿者による)。

・『増補袖珍かなつかひ』

(跋) 此書は風雅の席且は旅行の懷宝に伝へんか為に只其要をとれり
但仮名遣に古今あり其差別は用人の好所に有へし

・『狂歌かなつかひ』

(凡例) いにしへは仮字のまがふことなきを、はやく天曆のころより
みだれそめて、六百年このかた定家卿仮字づかひをはじめ、あらたに
仮字のことしるせるふみさはなれど、いにしへにうらがへる事なきわ
たくしごとなればとらず

(跋) いにしへの仮字にも今のかなてふものにもかなはざるもありて

・『古今かなつかひ』

(凡例) 今仮字といへるは、京極黄門のさだめおかせ給へりとかいひ
つたへて、定家かなづかひといへる書あり。それをもとゝして、これ
かれ考へあはせて。荒木田何がしがあつめたる、類字仮字づかひとい

へるもの、今の世にもはら用るもの也。(中略) 類としるせるは類字
仮字遣にて今かな也。

・『今古仮字遣』

(凡例) 今のかなは二人丸秘抄などを証とすべきわざなれど、こはい
ところえぬ (中略) 大かた我父故宗匠家より承りおけるを (後略)

・『尚古仮字用格』

(序) 世に仮字づかひの法を定めたるは、行阿仮名遣ぞはじめなるべき。それにつぎて、類字仮名遣和字解等のふみどもあなれど、みな後の世のおしはかりのみにして、古書によらざれば、すべてたしかなる證としがたし。

・『掌中仮字便覧』

(凡例) 又、定云々と記したるは定家かな也

上記の例で『増補袖珍かなつかひ』を除いた5種の資料はすべて定家仮名遣いに言及している。非古典仮名遣いの言葉が見られた7種の資料と合わせて考えると、少なくとも『古今かなつかひ』『今古仮字遣』『掌中仮字便覧』における非古典仮名遣いの言葉は定家仮名遣いで書かれたものであることが指摘できる(以後、本稿ではこの3種の資料における非古典仮名遣いの言葉を定家仮名遣いの言葉と称することがある)。『増補袖珍かなつかひ』では「今」の仮名遣いが何を意味するか具体的に述べられていないが、『狂歌かなつかひ』『古今かなつかひ』『今古仮字遣』で「今のかな」「今仮字」という表現が使われていることを踏まえると定家仮名遣いの可能性がある。したがって『増補袖珍かなつかひ』と『今古仮字遣』で「今～」と書かれている言葉は定家仮名遣いであると考えても差し支えないだろう。

3.2. 非古典仮名遣い表記が載っている資料について

本節では非古典仮名遣い表記が載っている7種の資料の特徴を個別に見ていく。

『和字便覧』と『改正増補和字便覧』は収録語ごとに非古典仮名遣いの例が添えられている他の資料と異なって「古ニ違ヘル仮字」という項目を別に設けている。そのためか、古典仮名遣いの収録語として立項されていないがこの項目には掲げられている言葉がある。『和字便覧』の場合、「危（アヤウシ）」「功（イサヲシ）」「甘（ムマシ）」「起（ヲコス）」「印（ヲシテ）」「蹉跎（タオヤカ）」「解（トヒテ）」が「古ニ違ヘル仮字」にのみ収録されている。

『和字便覧』の本文を訂正・増補した『改正増補和字便覧』では「危（アヤウシ）」「婀娜（タオヤカ）」の古典仮名遣いの収録語が追加されている。「功（イサヲシ）」は「古ニ違ヘル仮字」から削除され、「イサヲ」として古典仮名遣いの収録語が立項されている本文に移されている。「功」の古典仮名遣いはイサヲシであるため、『和字便覧』の誤りを訂正したものである。また、『和字便覧』では「用」の正しい仮名遣いはモチキで、モチヒは誤りとしているが、『改正増補和字便覧』では両方とも正しい仮名遣いとしている。そのほか、収録語の一部が訂正・削除されており、「老（オヒ）」「掙（ヲキテ）」「蛛ノ井（クモノキ）」「小（チイサシ）」などが「古ニ違ヘル仮字」に増補されている。

『正誤仮名遣』は一部の収録語に「～は誤也」「～とかくべからず」などの説明を加える形で非古典仮名遣いの例を提示している。『増補袖珍かなつかひ』は『正誤仮名遣』を著した賀茂季鷹のもので、⁸⁾見出し語の下に「今～」という形式で非古典仮名遣いの例を示している。収録語数は『正誤仮名遣』より少ないが、非古典仮名遣いの例の数は『正誤仮名遣』が32例、『増補袖珍かなつかひ』が48例⁹⁾で『増補袖珍かなつかひ』の方が多。また、『正誤仮名遣』にあるが『増補袖珍かなつかひ』にない言葉も多数ある。

『増補袖珍かなつかひ』で注目されるのは跋文に見られる非古典仮名遣いへの姿勢である。今回調査した他の資料で非古典仮名遣いの言葉はただ見出し語と共に立項されているか、誤った表記の例として立項されている。しかし、本書は跋文で「此書は風雅の席且は旅行の懐宝に伝へんか為に只其要をとれり。但仮名遣に古今あり。其差別は用る人の好所に有へし。」（下線は稿

者による)とあるように、非古典仮名遣い(定家仮名遣い)を使用することを許している。このような姿勢は『正誤仮名遣』で非古典仮名遣いの例を挙げて「～は誤也」「～とかくべからず」などと評価したことと相反する。

『古今仮字つかひ』は凡例で「類としるせるは類字仮字遣にて今かな也」と述べたように見出し語に定家系仮名遣書の『類字仮名遣』(寛文6(1666)年刊)の収録語を添えている。『類字仮名遣』から引用したものは言葉の右上に「」の記号が付いている。たとえば「いひ(械)」の場合、『類字仮名遣』の「いひ」にこの記号が付されている(右の図)。『古今仮字つかひ』に載っている『類字仮名遣』の収録語は計162例である。このうち「いめ(夢)」の項目にある『類字仮名遣』の「ゆめ」は仮名遣いの問題ではないと考えられるため、これを除けば161例である。

『古今仮字遣』は『増補袖珍かなつかひ』と同じく「今～」という形式で非古典仮名遣い(定家仮名遣い)の例を示している。

『掌中仮字便覧』は収録語の下に「定～」という形で定家仮名遣いの例を示している。これとは別に「いひぬ(入農)」-「いひの」「いひほ(疣)」-「いほ」「いめ(夢)」-「ゆめ」「えやみ(瘡)」-「おこり」「をそ(嘘)」-「うそ」の5例に「今～」という形式が用いられている(前者は見出し語、後者は「今～」で示された語)。用例からわかるように本書の「今～」は非古典仮名遣いの言葉を示すものではなく、まったく別語を示すものである。

ここで注目されるのは「いめ(夢)」に対する「ゆめ」の解釈が『古今仮字つかひ』と異なることである。『古今仮字つかひ』は『類字仮名遣』の「ゆめ」を挙げ、事実上「ゆめ」は定家仮名遣いで書かれた言葉であると見なしているが、『掌中仮字便覧』は「定～」ではなく「今～」で示している。すなわち、『掌中仮字便覧』の著者は「ゆめ」が定家仮名遣いと関係ない語であると判断したということである。また、「をとめ(処女・不通女)」の一箇所だけ「乙女と書ハ誤也」と、「定～」と「今～」以外の形式で非古典仮名遣いの例が示されている。

一方、資料によって非古典仮名遣いを示す著者の態度に相違がある。『和



字便覧』『正誤仮名遣』『改正増補和字便覧』は古典仮名遣いではないものは間違っているという立場に立っている。それに対して『増補袖珍かなつかひ』は非古典仮名遣いを使用しても構わないと述べている。そもそも非古典仮名遣い表記の正誤を問題としていない。『古今仮字つかひ』『今古仮字遣』『掌中仮字便覧』は非古典仮名遣いの例を共に載せてもそれに対する正誤判断はほとんどしていない。『掌中仮字便覧』に一箇所見られる程度である。単純に共に載せる程度にとどまっているのである。これはおよそ『古今仮字つかひ』の時期から見られる変化として捉えるべきだろうか。

4. 定家仮名遣い系統の仮名遣書との比較

定家系仮名遣書は様々存するが、今回は慶長版本『仮名文字遣』と『新撰仮名文字遣』『類字仮名遣』の三つを用いる。いずれも理論や規則を述べるより言葉を並べることを主な目的としたものである。慶長版本『仮名文字遣』（以下、『仮名文字遣』と略す）は近世の間に広く流布した定家系仮名遣書である。『新撰仮名文字遣』は「掲出するかなづかいそのものが中世末期の「和歌・連歌世界」における実態ときわめてよく一致する点において、当該時期の求めによく対応した内容をもっていると評価することができる。」¹⁰⁾と評価されているため取り上げる。

『類字仮名遣』は「『定家仮名遣いの伝流』の首席」に相応しい¹¹⁾という評価がある。また、『古今かなつかひ』の凡例の「荒木田何がしがあつめたる、類字仮字づかひといへるもの、今の世にもはら用るもの也。」や、『尚古仮字用格』の序文の「世に仮字づかひの法を定めたるは、行阿仮名遣ぞはじめなるべき。それにつぎて、類字仮名遣和字解等のふみどもあなれど」という記述から、本書が当時定家系仮名遣書の一つとしてよく知られていたことが推測できる。特に『古今かなつかひ』が凡例で「類としるせるは類字仮字遣にて今かな也。」と本書を参考にしていることを明示しているため、今回の調査で使用した。

『仮名文字遣』『新撰仮名文字遣』『類字仮名遣』の収録語と3節の調査で得られた非古典仮名遣いの言葉を比較した結果、表記が異なるものが一部確認された。また、そもそも定家系仮名遣書から言葉自体が見つからないものもあった。その内訳を示したのが次の表2である。「非古典仮名遣い合計」は古典系仮名遣書における非古典仮名遣いの言葉の数である。「不一致・なし」は定家系仮名遣書の収録語と仮名遣いが一致しないか、定家系仮名遣書に言葉が立項されていないため比較できない言葉の数である。

【表2】 古典系仮名遣書における非古典仮名遣いの言葉の数

	非古典仮名遣い合計	不一致・なし
和字便覧	96	10
正誤仮名遣	32	6
増補袖珍かなつかひ	48	3
改正増補和字便覧	106	10
古今仮字つかひ	161	13
今古仮字遣	154	38
掌中仮字便覧	85	25

表2の「不一致・なし」の詳細を表3として本稿の最後に示す。空欄は言葉が立項されていないか、非古典仮名遣いの例が示されていない項目である。『和字便覧』から『掌中仮字便覧』までは各資料における見出し語を太字で上に、掲げられた非古典仮名遣いの例を下に示す。網掛けの箇所が「不一致・なし」に該当する項目である。また、問題になる語に下線を引いた。括弧内の仮名表記は見出し語の下に二行割注などで示された語である。調査の結果、述べ語数で計105例、異なり語数で計82例が見られた。表に74番までであるのは『今古仮字遣』の例の一部を一つの項目にまとめた(斜線で区分)ためである。¹²⁾

「不一致・なし」の数は非古典仮名遣いの例の全体に比べて少数であるが、単なる誤記と解釈するには無視できない数であると思われる。定家系仮名遣書では確認できなかったが、複数の古典系仮名遣書に共通に見られる言葉に(8)「嘶」のハ行活用「いばふ」「いばへ」と、(17)「をこす(起)」(70)「おとめ(乙女)」がある。このうち、(8)「嘶」のハ行活用「いばふ」「いば

へ」と(70)「おとめ(乙女)」はいずれも間違った仮名遣いの例として掲げられている。『掌中仮字便覧』で仮名遣いの正誤判断が見られる唯一の例が(70)「おとめ(乙女)」であることは前節で述べたとおりである。以下、資料ごとに非古典仮名遣いの例を見ていく。

『和字便覧』の「古ニ違ヘル仮名」について清水(1981)は『和字正濫鈔』や『和字正濫要略』中に間違った表記の例として出ているものを抜き出したものであると述べている。しかし、必ずしも『和字正濫鈔』や『和字正濫要略』の内容をそのまま引用しているわけではない。たとえば、『和字正濫鈔』は「とほる(通)」を「とをる」と書かないように注意しているが、『和字便覧』の「古ニ違ヘル仮名」には(56)「とおる」が挙げられている。「とおる」は『仮名文字遣』と『類字仮名遣』に見える。

『和字便覧』にのみ見られるものに(5)「キケ」がある。「池」の間違った仮名遣いとして掲げられているが、定家系仮名遣書では見られない表記である。『仮名文字遣』では「いけのいる(池槭)」、『類字仮名遣』では「いけのころ(池心)」で、いずれもイケである。他に(42)「クハンザフ」と(61)「フケイ、」がある。これらは『改正増補和字便覧』で定家系仮名遣書に見られる「クハンザウ」「フケキ」に訂正されている。また、(65)「オ(岑)」は定家系仮名遣書のいずれにも見られない。

『改正増補和字便覧』は『和字便覧』の誤りを訂正した上で内容を増補したものであるが、「古ニ違ヘル仮名」で増補されたものの中には(15)「オキテ(於)」と(60)「ヒキナ(雛)」のように出典が不明なものが含まれている。特に「オキテ」は『和字便覧』の「ヲヒテ」を修正したものである。「ヲヒテ」は今回調査した定家系仮名遣書のすべてに見られる。

『正誤仮名遣』は『和字正濫鈔』を補うテキストとして編まれた可能性が高いという指摘があるが、¹³⁾ 今回の調査で『和字正濫鈔』の影響と思われるものが新たに見られた。(35)「薫」について本書は「かほる」を見出し語にしている。¹⁴⁾ 「古本催馬楽歌に加保留とあるによれり。万葉第二に香乎礼流とある乎は本の誤也といへり」という注からカヲルは誤りでカホルが正しい

と考えていることがわかる。一方、『改正増補和字便覧』は逆にカヲルを正しいものとし、「カホリ」を「古ニ違ヘル仮字」に収録している。『古今仮字つかひ』『今古仮字遣』『掌中仮字便覧』ではいずれも見出し語は「かをる」で、「かほる」は定家仮名遣いの例として掲げられている。

『正誤仮名遣』における「薫」の仮名遣いの解釈が他の資料と逆になっているのは、おそらく『和字正濫鈔』で「かほる」の方が正しいと述べられていたためであると考えられる。『和字正濫鈔』では「かほる」と「かをる」の二つの項目が別々に立項されているが、「かをる」の項に「常にはかほるなり。万葉第二に、香乎礼流カヲレとある故に、こゝにも出す。常によるへし」という注が付されている。これを見る限り、契沖はカホルの方が正しいと考えていたと解釈できる。『正誤仮名遣』はこの解釈を引き継いだのだろう。「万葉第二に香乎礼流とある」という記述も『和字正濫鈔』の説明を踏まえたものであると考えられる。岡田(1937)は跋文の記述を問題にし、¹⁵⁾本書が『古言梯』の誤りを訂正する目的で編まれたと論じているが、「薫」の仮名遣いの例から『和字正濫鈔』の影響があったことが言える。

一方、(53)「小(ちいさし・ちゐさし)」の「ちゐさし」は定家系仮名遣書、かつ他の古典系仮名遣書に見られない。本書が影響を受けた『和字正濫鈔』には「ちいさしと書へからず」とあって「ちゐさし」は言及されていない。

『増補袖珍かなつかひ』にのみ見られるものに(12)「浦廻(うらは)」と(37)「悔(くる)」がある。定家系仮名遣書ではそれぞれ「うらわ」「くひて・くふる」とある。『増補袖珍かなつかひ』の「浦廻」の見出し語は「うらわ」でむしろ定家仮名遣いと一致する。また、「悔」について『和字便覧』『改正増補和字便覧』『古今仮字つかひ』は間違った仮名遣いとして、あるいは定家仮名遣いの例としてハ行活用を挙げているが、本書はワ行活用を挙げている。「薫」の見出し語は「かほる」で『正誤仮名遣』と同じである。カヲルは示されていない。

『類字仮名遣』を引用したと述べた『古今仮字つかひ』の場合、『類字仮名遣』と仮名遣いが異なるものが12例、『類字仮名遣』に項目さえ存在しな

いものが1例見られた。本書は『類字仮名遣』に見出し語の活用形などが書かれていればそれも引用している。¹⁶⁾しかし、(3)「あいをひ・あいおひ(相老)」(7)「みちひ(櫟)」(17)「をこす(起)」(26)「をひ(負)」(46)「さへのかみ(道祖)」(56)「とをる(通)」(63)「ほゝ(頬)」(71)「おはり(尾張)」(72)「おはり(終)」はいずれも『類字仮名遣』と異なる仮名遣いを用いている。このうち(17)「をこす(起)」(56)「とをる(通)」(72)「おはり(終)」は他の古典系仮名遣書でも見られる。

また、(9)「いゝ(飯)」(16)「をき(をく)(奥)」(33)「をろし(卸)」は『類字仮名遣』に項目はあるが対応する表記がない。すなわち、『類字仮名遣』にないものが追加されているということである。さらに、(24)「おのへ(各)」に『類字仮名遣』の収録語として「をのへ」が挙げられたが、実際のところ『類字仮名遣』には「をのへ」の項目自体が見当たらなかった。

他の古典系仮名遣書に見られるにもかかわらず本書の(56)「とをる(通)」にのみ網掛けが施されているのは、本書が他の資料と異なって『類字仮名遣』という特定の資料の収録語を引用したことを明らかにしているためである。「とをる」という表記は『新撰仮名文字遣』で確認できるが、『類字仮名遣』では「とおる」と「とほる」があるのみである。また『類字仮名遣』の伝本に本文の異同は報告されていないため、この13例は『古今仮字つかひ』の著者が任意に手を加えたものであると考えられる。本来は別の出典を挙げるべきであるが、『類字仮名遣』のものとして一括にして処理したのではないだろうか。

『今古仮字遣』で「今～」として提示されたものの中で定家系仮名遣書に確認できないものは38例で最も多い。このうち(11)「むまひと(貴人)」(19)「をとおち(叔父)」(43)「こはたか(大語)」(52)「たおり(撓)」(65)「やつおのつはき(八峯椿)」は定家系仮名遣書に項目がない。

『掌中仮字便覧』にも「不一致・なし」が多数ある。その中で(67)「くちをし(惜)」は見出し語と定家仮名遣いの例が同一である。このような例はごく稀で他には『古今仮字つかひ』の(46)「さへのかみ(道祖)」がある程度である。また、(59)「ねづみ(鼠)」は非古典仮名遣いの例の中で唯一四

つ仮名に関するものである。

5. まとめ

仮名遣書は著者が思う正しい仮名遣いを示す資料で、場合によって本文で主に提示しているものと異なる仮名遣いを共に挙げることもある。誤った仮名遣いの例として挙げることもあれば、正誤判断はせずに言葉のみ挙げることにとどまることもある。今回は『古言梯』以降活発に制作された古典系仮名遣書における非古典仮名遣い表記を定家系仮名遣書の収録語と比較した。

非古典仮名遣いについて『和字便覧』『正誤仮名遣』『改正増補和字便覧』は「古ニ違ヘル仮字」という項目を設けるか「～は誤也」「～とかくべからず」という記述を添えている。それに対して『増補袖珍かなつかひ』は非古典仮名遣いの使用を許している。『古今仮字つかひ』『今古仮字遣』『掌中仮字便覧』は単純に「今～」「定～」などで示すことにとどまっている。

各資料における非古典仮名遣いの例を定家系仮名遣書の収録語と比較した結果、定家系仮名遣書の収録語と仮名遣いが一致しないか、古典系仮名遣書にしか見られないものがあることが確認された。『古今仮字つかひ』の場合、凡例で述べられていることと異なって『類字仮名遣』に存在しない言葉が載っていた。仮名遣書を製作するにあたって必ずしも他の仮名遣書のみ参考にする必要はないため、このような結果はある意味当然だろう。

まだ出典がわからない非古典仮名遣い表記については今後さらなる調査が必要である。たとえば、定家系仮名遣書との比較で確認できなかったものの一部は大島本・三条西家本源氏物語に見られたりする。このように定家系仮名遣書以外の資料を参照することで古典系仮名遣書における非古典仮名遣い表記の性格を明らかにすることができるだろう。高瀬（1997）は仮名草子と俳文集を用いたが、仮名遣書は主に国学や歌を学ぶ人が利用するものであるため、近世の一般小説より少なくとも国学や歌を学ぶ人が接するような資料を探って比較する方が適切であると思われる。今後の課題としたい。

【表3】表2の「不一致・なし」の詳細

		仮名文字遣	新撰仮名文字遣	類字仮名遣	和字便覧	正誤仮名遣
1	明旨			あきじひ		
2	紫陽花	あちさひ あちさへ		あちさひ(あちさへ)		
3	相老	あひおひ あひをひ(相生)	あひおひ(相生)	あひおひ(あひをひ)(相生)		
4	陟釐	あおのり あをのり	あをのり	あをのり(あおのり)		
5	池	いけのいゐ (池械)		いけのこゝろ(池心)	イケ キケ	
6	礎	いしすゑ		いしずゑ		
7	櫟	いちゐの木 (みちみ)	いちゐのき	いちゐのき(みちみ)	イチヒ イチキ	いちひ いちゐ
8	嘶	いはゆ	いはゆ	いばゆる(いばえ・いばう)	イバユ・イバエ イハヘ	いばゆ (いばえ・いなゝく) いばふ
9	飯	いひかしく (麩・飯炊)	いひ	いひつぶ(飯粒) いひだこ(飯章魚) いひのお(飯尾)		
10	愈			いゆる	イエル イヘル	
11	貴人					
12	浦回・ 浦廻			うらわ		
13	緑	えにしあれは (緑)		えにしあれば(緑尔師有者) えんぎ(緑起)など		
14	綾・老懸	おひかけ	おひかけ	おひかけ		
15	於	をいて をひて	をひて	をいて(をひて)	オイテ ヲヒテ	
16	奥	おくやま(奥山)		おくやま(奥山)など		
17	起	をこしすみ (興炭) おこる をこり	をこしすみ(興炭) おこしたつる (起立) おこる	をこしずみ(興炭) をこり (おこる・おこす・おこし)	ヲコス	
18	遣	おこする人もなし		おこする人もなし (おこせよ)		
19	叔父					
20	頤	おとかい	おとかひ	おとがい		
21	弟嫁	おとよめ	おとよめ	おとよめ		
22	衰	おとろふ (おとろへ)	おとろへ	おとろふ(おとろへ)		
23	同	おなじこと	おなじく	おなじこと(同事)		
24	各	をのへ	をのへ			
25	祖母	おうは		おうば		おば をば

増補疎かなつかひ	改正増補和字便覧	古今仮字つかひ	今古仮字遣	掌中仮字便覧
			あきじひ(矇) あきじゐ	
				あぢさゐ あづさい
		あひおい あいをひ(あいおひ)		あひおひ あひをひ
				あをのり あほのり
				いしずゑ いしずへ
	イチヒ イチキ	いちひ いちゐ(あぢひ)		いちひ(赤薔・櫟) いちゐ
	イバユ・イバエ イバへ			
		いひ いゐ	いひ/いひかひ(飯匙)/ かたかしきのいひ(修食簞)/ こはいひ(強飯) いゐ/いゐかひ/ かたかしきのいゐ/こはいゐ	
	イエ イへ			
			うまひと(君子) むまひと	
うらわ(浦廻) うらは				
				えに ゑに
				おいかけ をひかけ
	オイテ オキテ			
		おき(おく) をき(をく)	おくつき(幕) をくつき	
	ヲコス	おこし(おこす)(起・興) をこし(をこす・おこる)		おこし(興・発・起) をこし
			おこせ をこせ	おこせ をこせ
			おとおち をとおち	
			おとがひ(額) をとがひ	
			おとよめ をとよめ	
			おとろふ/おとろへ をとろふ/をとろへ	
				おなじ をなじ
		おのへ をのへ	おのへ をのへ	おのへ をのへ
おば をば				

		仮名文字遣	新撰仮名文字遣	類字仮名遣	和字便覧	正誤仮名遣
26	負	おいて おひて おふ	おひて	おふ(おひて・おいて)		
27	覆	おほふ をほひ	おほひ・おほふ	をほひ (おほひて・かひおほひ)	オホフ ヲホフ	
28	臣					
29	赴	をもむき おもむく	おもむき	をもむき(おもむく)		
30	泳	およく		およぐ		
31	下	おりはへて (下榮)	おりて	おりはへて(下榮)		
32	稽			をろかをひ		
33	卸			おろす(税・下)		
34	餉	かれみひ		かれいひ		
35	薫	かほる		かほる(かほり)		かほる かをる
36	競	きおふ きをひて	きをひ・ きほひ・きおふ	きおふ(きをひ)	キオフ キオフ・キヲフ	
37	悔	くひて		くふる(くひて)	クイ クヒ	
38	頰	くつをる	くつをる	くづをる(くづをれて)		
39	蟷螂					
40	人参			くまのい		
41	蛛網			くものい		
42	萱草	くはんさう		くはんざう	クワンザフ クハンザフ	
43	声高					
44	幸	さいはい	さいはひ	さいはい	サイハヒ サイハイ	
45	囀	さへつる	さへつり・さへつる	さへずる		
46	道祖神	さえのかみ さゑのかみ (さいのかみ)		さいのかみ (さえのかみ・さゑのかみ)		
47	下枝	しつえ(沈枝)	しつえ(沈枝)	しづえ(沈枝・下枝)		
48	枇			しひなせ		
49	素直	すなほ	すなほ	すなほ		
50	末遂			すゑつみに		
51	貴	たふとし		たふとし		

増補袖珍かなつかひ	改正増補和字便覧	古今仮字つかひ	今古仮字遣	掌中仮字便覧
		おひ(おふ・おはん) をひ		なにしおふ なにしをふ
	オホフ ヲホフ	おほひ (おほふ・おほへり・おへり) をほひ (おほひて・かひおほひ)		
	オミ ヲミ			
		おもむく をもむき(おもむく)		おもむく をもむく
			およき をよき	
				おり をり
			おろかおひ をろかおひ	
		おろし をろし		
			かれひ(かれいひ) かれゐ	
	カラル カホリ	かをる かほる	かをる かほる	かをる かほる
	キホフ キオフ・キヲフ	きほひ(きほふ・ きほへる・きそひ・きそふ) きおふ(きをひ)		きほひ きをふ
くい(くゆ・くやむ) くゐ	クイ クヒ	くい(くゆ) くひ		
			くつをる くつおる	
				くひ くゐ
			くまのい くまのゐ	
	クモノイ(蜘蛛ノイ) クモノヰ(蜘蛛ノ井)			
	クワンザウ クハンザウ			
			こわたか(大語) こはたか	
	サイハヒ サイハイ			さいはひ さいはえ
				さひづる さえづる
		さへのかみ(道祖) さいのかみ (さえのかみ・さへのかみ)		
				しづえ しづゑ
			しひなせ しゐなせ	
			すなほ(質直) すなを	
				すゑつひに すへつゐに
				たふとし たうとし

		仮名文字遣	新撰仮名文字遣	類字仮名遣	和字便覧	正誤仮名遣
52	撓					
53	小	ちいさし ちひさし		ちいさし(ちひさし)		ちひさし ちいさし・ちみさし
54	使・遣	つかひ つかふ	つかひ	つかへ(つかふ)		
55	調	と、のへ と、のほる		と、のふ (と、のひ・と、のへ)		
56	通	とおる とほる	とをる	とほる(とおる)	トホル トオル	
57	直会			なうらひ(なうらい)		
58	新	にのみくら (新枕)	にのみくら(新枕)	にのみなめのまつり(新嘗会) にのみはり(新治) にのみしきち(新敷釣) にのみくら(新枕) にのみくさ(新草)など	ニヒ ニキ	にひ にみ
59	鼠		ねすみ	ねすみくひへみ (ねすみくひへひ)(黄額蛇)		
60	雛	ひなあそひ (雛遊)		ひいなあそひ (ひなあそひ)(雛遊)		
61	吹飯	ふけいのうら (吹飯浦) ふけるかは (吹飯河)		ふけるのうら(吹飯浦)	フケヒ フケイ、	ふけひのうら (吹飯浦) ふけるのうら
62	補			ほしいひ		
63	頬			ほう(ほを)		
64	聲	み、しひ		み、しひ		
65	岑				ヲ エ	
66	夫	をうと	をうと	をつと(をうと・おとこ)		をうと をふと
67	惜	おしむ(おしき) をしみたはふ (惜持)	おしむ	おし (おしむ・おしき・をしみ) くちおし(口惜)	ヲシム オシム	をしむ おしむ
68	食			をす		
69	老翁			をぢ(伯父)		
70	少女	をとめ	をとめ	をとめ	ヲトメ オトメ	をとめ(少女・慶女) おとめ(乙女)
71	尾張	をはりのくに	おはり	をはりの国		をはり おはり
72	終	をはる(をはり)		をはり(をはる ・をふる・おはつて)		
73	居	をり		をり(をれ・をる・をらん)		
74	折	おりふし(折節)	たをる(手折) おる	たをる(手折) おりへ(折々) おる		をる(をり) おり

増補袖弥かなつかひ	改正増補和字便覧	古今仮字つかひ	今古仮字遣	掌中仮字便覧
			たをり たおり	
ちひさし ちいさし	チヒサシ チイサシ			つかひ(使・遣) つかい
				と、のひ と、のい
とほる とをる	トホル トラル	とほる とをる	とほる/とほりぐま(通熊)/ そとほりひめ(衣通姫) とをる/とをりぐま/そとをり ひめ	
		なほらひ なうらひ(なうらい)	なほらひ なをらひ	
にひ にゐ	ニヒ ニヰ		にひ/にひばり(新治)/ にひなへ(新普会) にゐ/にゐばり/にゐなへ	にひ にい
				ねずみ ねづみ
	ヒ、ナ ヒヰナ			
ふけひの浦(吹飯浦) ふけるのうら	フケヒ フケヰ		ふけひ ふける	ふけひ ふけい
			ほしひ ほしゐ	ほしいひ ほしい
		ほ、 ほう(ほゝ)		
			み、しひ み、しゐ	
	ヲ オ		やつをのつはき(八峯椿) やつおのつはき	
	ヲシム オシム	をしみ (をしむ・をしけく)(憂) おしむ(おしき・をしみ)	をし(をしむ・をしみ) (愛・惜) おし(おしむ・おしゐ)	くちをし(口惜) くちをし
			をし(をしず・をしせ) おし(おしず・おしせ)	
			をち おち	
				をとめ (処女・不通女) おとめ(乙女)
をはり おはり		をはり おはり	をはり おはり	
		をはり(をへ) おはり(他の活用形は「を」)	をはり(をへ)/をへず(不終) おはり/おへず	
			をり(をる) おり	をり おり
をり(時々) おり(時々)	ヲリ オリ	をり(をる) おり(おる)	したをれ(下折)/たをり(手折)/ つゝをり(九折)/よをり(節折)/ をり(をる)/をりふし(時節) したおれ/たおり/つゝらおり/よ おり/おり(おる)/おりふし	

〔註〕

- 1) 揖斐(2006)
- 2) 盛田(2015)
- 3) この時期の古典系仮名遣書に、久保田(2017)によって『和字正濫鈔』と『類字仮名遣』を抜き書きしたことが明らかになった『万葉仮名遣』がある。
- 4) ただ、一方では『仮名文字遣』の主張を取り入れて許容の仮名にする面もある。『初心仮名遣』は本文の前の「同抄誤之分」の項で「先人ノ作書ニ号スルニ仮名遣一歩抄ト一者アリ。是益アル書也」と、『一歩』(延宝4(1676)年刊)を挙げている。『一歩』は『仮名文字遣』の誤りを指摘した資料である。また、同項には『一歩』下巻の記述が引かれており、「彼旨ヲ以テ」と、『一歩』の記述に基づいて『仮名文字遣』の誤りを訂正する旨が述べられている。しかし、久保田氏の調査によれば『一歩』の批判の対象の中心的であるような語や部分でさえ『仮名文字遣』に従っている。
- 5) 「とをる」に関しては「仮名遣い書でも定家系の『初心仮名遣』などでは『仮名文字遣』と同様であるが、『九折仮名遣』を始めとして「とをる」をとるものもあるようである」(p.35)と述べている。『九折仮名遣』は三条西実隆著で木枝(1933)では定家系仮名遣書として紹介されている。
- 6) 調査は久保田(1986)の表を用いて行なつたと注を付けている。久保田(1986)は近世初期の仮名草子と俳文集の仮名遣いを分析したものである。
- 7) ただ、それがどのような資料であるかは示されていない。
- 8) 雲錦亭は季鷹が住んだ自邸の名前である。(盛田(2015) p.214)
- 9) 「あさもよし(麻裳吉)」に「今あさもよひ」と注が付されているが、これは仮名遣いの問題を示した例ではないと判断して除外した。
- 10) 『国語学大辞典』の「新撰仮名文字遣」の項目(執筆著者：今野真二)から抜粋。ただし、『新撰仮名文字遣』は現存本少なく、すべて写本であることから「一般的に、広く読まれたものとは考えられない。」(大友・木村(1981) p.256)という評価も受けている。
- 11) 安田(1994) p.17
- 12) 仮名遣いの問題がある語が同じなら一つの項目にまとめた。たとえば、「いひ(飯)」「いひかひ(飯匙)」「かたかしきのいひ(修食饋)」「こはいひ(強飯)」の項目に添えられている「いゐ」「いゐるかひ」「かたかしきのいゐ」「こはいゐ」は、いずれも「飯」の仮名遣いが「いひ」か「いゐ」で書かれていることを示している。言葉は別々であるが、この4例は「飯」の仮名遣いと関係あることで共通している。そのため、表3では(9)「飯」の項目にまとめて提示した。同じく(74)「折」も非古典仮名遣いを示した言葉の中で「折」の仮名遣いと関係のあるものをまとめている。
- 13) 今野(2016) pp.218-219

- 14) 伝本によって「かをる」を載せたものもある。たとえば、早稲田大学図書館蔵本の一つは見出し語の「ほ」の右に「を」を書き込んでいる。弘前市立弘前図書館蔵本では「かをる」と書かれた紙切れが別に挟まれている。
- 15) 跋文に「彼正濫抄にはたて横にかよふ五の音^{いっ、こゑ}もて、上中下のかなつかひをわかちたれば、とみに尋出んにはたよりあしかなりとて、こたひ我友賀茂季鷹のうし^{よそぢ}四十まり七文字のかんなをかしらにあつめて、種々の言のはをわかち給へるは(後略)」とあるが、ここで言う「正濫抄」が実は『古言梯』で、『和字正濫鈔』と勘違いした記述であると指摘した。検索方法が五十音図によっていることが不便であるためいろは順に直したと跋文は述べているが、『和字正濫鈔』は「い・ゝ・ひ・を・お・ほ」の順番で部を立てており、五十音図によっていない。また、各部の収録語はいろは順である。それに対して『古言梯』の部立ては五十音図によっている。当時古典仮名遣いに即した仮名遣書のうち、五十音図によって収録語を分類したものは『古言梯』のみであるため、「正濫抄」は『古言梯』を指していると主張した。
- 16) ただ、『類字仮名遣』の内容を必ずしもそのまま引用しているわけではない。『類字仮名遣』の内容を著者なりにまとめた項目もある。たとえば、「初穂」の場合『類字仮名遣』で「はつを(最花)」「はつお(初尾)」「はつほ(初穂)」と、漢字表記が三つ挙げられているが、『古今仮字つかひ』では「初穂」のみ取っている。仮名表記は『類字仮名遣』の三つの例をすべて引用している。

〔調査資料〕

『改正増補和字便覧』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ02 00810）

『雅言仮字格』『雅言仮字格拾遺』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ 02 00632）

『仮字用格早引』：京都大学文学研究科図書館所蔵本（請求記号 3C/25）

『仮名文字遣』：大友信一・木村晟 編（1980）『仮名文字遣』汲古書院

『狂歌かなつかひ』：日本古典籍総合データベース（書誌ID 100270183）

『古今仮字遣』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ02 00498）

『古今仮字つかひ』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ02 05627）

『尚古仮字用格』：国立国会図書館デジタルコレクション（請求記号 842-74）

『掌中仮字便覧』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ02 05672）

『初心仮名遣』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 文庫31 E0927）

『新撰仮名文字遣』：大友信一・木村晟 編（1981）『新撰仮名文字遣』汲古書院

『正誤仮名遣』：早稲田大学古典籍総合データベース（請求記号 ホ02 00568）

『増補古言梯標註』

- ・早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 ホ02 04813 / ホ02 00568)
- ・日本古典籍総合データベース(書誌ID 100215933)

『増補袖珍かなつかひ』

画像：早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 文庫31 E1287)

書誌：早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 文庫31 E0928)

『増補正誤仮名遣』：早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 ホ02 00572)

『文章仮字用格』：早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 ホ02 00413)

『山路のたづき』：国会図書館所蔵本(請求記号 811.56-Sa533y)

『類字仮名遣』：早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号 ホ02 01139)

『和字正濫鈔』：築島裕他 編(1973)『契沖全集』第10巻 岩波書店

『和字便覧』：日本古典籍総合データベース(書誌ID 200006370)

[参考文献]

- 揖斐高「賀茂真淵の和歌添削—自筆本『賀茂真淵評草盧和歌集』を通して—」『国語と国文学』83(至文堂)2006 pp.1-16
- 岡田希雄「古言梯版種攷 二」『立命館文学』4-8(立命館出版部)1937 pp.56-86
- 康盛国「『源語詰』と『源語梯』の比較—見出し語の照合を中心に—」『京都大学國文學論叢』35(京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室)2016 pp.71-102
- 木枝増一『仮名遣研究史』(贅精社)1933
- 久保田篤「近世初期板本の仮名づかい」『国語と国文学』63巻12号(東京大学国語国文学会)1986 pp.58-76
- 「『初心仮名遣』の示す仮名遣いについて—活用語尾を中心に—」『成蹊國文』第47号(成蹊大学文学部日本文学科)2014 pp.32-55
- 「『初心仮名遣』における和語の「い・ひ・ゐ」について」『成蹊國文』第49号(成蹊大学文学部日本文学科)2016 pp.58-72
- 「『万葉仮名遣』の依拠した仮名遣書について」『成蹊國文』第50号(成蹊大学文学部日本文学科)2017 pp.27-63
- 国語学会編『国語学大辞典』(東京堂出版)1980
- 今野信二『仮名遣書論攷』(和泉書院)2016
- 清水勝「小沢芦庵著『かなつかひ』と渾沌齋松月著『蘇字便覧』について」『文学史研究』22(大阪市立大学国語国文学会)1981 pp.29-36
- 高瀬正一「『和字正濫鈔』における定家仮名遣いについて—批判と受容の実態—」『国語国文学報』55(愛知教育大学国語国文学研究室)1997 pp.29-40
- 盛田帝子「二条派から古学派へ—堂上歌学の変容と地方への伝播—」『国文学研究資料館調査研究報告』第35号(人間文化研究機構国文学研究資料館)2015 pp.21-26

安田章「平仮名文透視」『国語国文』63-9(中央図書出版社)1994 pp.1-19

屋名池誠「『近世通行仮名表記』―「濫れた表記」の冤を雪ぐ―」『近世語研究のパスベ
クティブ』(笠間書院)2011 pp.153-181

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Non-Historical *Kana* Orthography in *Kana* Orthography Note of
 Historical *Kana* Orthography After *Kogentei*:
 Comparing with *Kana* Orthography Note of Teika's *Kana* Orthography

Seong Mun, KANG

Kana orthography notes are materials that show the author's thoughts on correct *Kana* usage, and in some cases, *Kana* usage, which is different from that shown mainly in the text, is mentioned. It is sometimes cited as an example of incorrect *kana* orthography, but it is also cited only as a word without judging right or wrong. This paper compared non-historical *Kana* orthography words in *Kana* orthography note of historical *Kana* orthography, which were actively produced after *Kogentei* with the words included in *Kana* orthography notes of Teika's *Kana* orthography.

The words of non-historical *Kana* orthography in *Kana* orthography note of historical *Kana* orthography are shown in various ways. First of all, some materials made a item for those words. Another materials indicated the words of non-historical *Kana* orthography with a note saying 'do not write this way' along with the headword. However, there is a material that permitted to use those words. On the other hand, some materials simply listed the words of non-historical *Kana* orthography without judging right or wrong.

As a result of comparing the words of non-historical *Kana* orthography in each document with the words in *Kana* orthography notes of Teika's *Kana* orthography, it was confirmed that some of them don't match the words in *Kana* orthography notes of Teika's *Kana* orthography. Also, there are some words found only in *Kana* orthography note of historical *Kana* orthography. Such a result is natural in a sense because it is not necessary to refer only to other *Kana* orthography notes when making *Kana* orthography notes.